

現代詩とその思想的背景

三 宅 晶 子

現代詩の諸相を現代思想の多様な分化と、その各々の独自の発展の上に広く位置づける試みは、筆者の知る限りではまだ始まっていない。ただ五年前にリチャード・エルマン、チャールス・フェイデルソン両教授が現代思想と現代文学批評を形成した書物からの抜粋を「現代の伝統」¹と題するアンソロジーに纏め、従来は個々の作家に関する専門的研究のため忘れられていた現代文学の思想的背景を見渡すことを可能にしている。この「現代の伝統」から主として材料を得ながら、現代思想の屈折し、分岐していく背景を基盤として、英米の優れた現代詩人達、特にイエーツ、パウンド、エリオット、クレーン、ステイヴンス、オーデン、ロウエルの思想的背景を調べ、多様な英米現代詩の分類を試る事がこの論文の目的である。念のためこの論文の論旨は一切筆者のものであり、エルマン・フェイデルソン両教授による現代思想の紹介とは関係のないことを附記しておきたい。

現代詩の胎動期は一八八〇年代のフランス、すなわちエロー、ペラダン、ラザール、モリス、ヴィエレーグリアン等の象徴派の群少批評家達がテーヌの文学的知識と科学的知識との同一視に反対して「ルヴェ・アンデパンタン」²に結集した時期に求めるべきだろう。テーヌの「芸術哲学」³によると芸術は科学と同じく、原因、結果の方則によって探究される知識であり、ただ科学の抽象的な正確な言語ではなく感覚と心情に訴える言語で探求されるだけの差に過ぎない。テーヌの主張をさらに極端化したのがゾラの「実験小説」の観念で、作家の仕事は生物学者の仕事と等しく、一定の遺伝を持つ作中人物を一定の環境に置いて観察し、科学的知識を得る事であると考える。⁵しかし、テ

一ヌ、ゾラのいずれの場合においてもその「科学的」言語は「感覚」と「心情」に訴える限り不正確さは免れぬゆえ、十九世紀フランスの現実主義批評家達は文学に二流の科学という地位を与えた事になり、ここに象徴派が新たに詩の言語の独自性を追求し始めた理由があった。

象徴派の見出した詩の知識は経験的知識と異なり、ポードレルが夢 (rêve) と呼んだ外界と主観の双方を含むものだった。また詩の言語は科学の言語と異なり伝達を目標とせず、理想化を目標とする事を発見した時、象徴派の批評家は現代詩の最も重要な特性である「詩の言語の自律性」を自覚した。後に象徴派から出発したヴァレリイは詩の言語の特殊機能に有名な「詩対散文Ⅱ舞踏対歩行」という比例式で明晰な説明を与えている。詩の言語は舞踏の運動の様にそれ自体が目標であり、歩行の如く伝達という目的地に達する為の手段ではない。言語の舞踏がその理想化された運動により、世界と人をつなぐ意味のあの完全さ(美)の型を詩の「知識」として啓示する時、この知識は人間の他の精神活動、たとえば科学による批判を受けつけぬという意味において絶対である。このゆえに詩はオーデンが名づける如く一つの儀式であり、儀式の運動が美しく執行される限りその神聖さはたとえ詩人が人生の無意味と文化の解体を啓示する場合でも変りはない。¹⁰

象徴派とテーヌの論争はこの様に詩の言語を人間活動の他の分野から完全に独立した自律的なものとして規定する事により、自然科学、社会科学の実証主義に正面から対立する力として詩の存在理由を打立てた点で重要である。象徴詩運動において詩は生産技術の発展とともに一層巧利的に組織化されて行く現代社会に背馳するものとして出発した。シェレイの信じた如く詩人が立法者また教師として、新しい世界を実現すべき理想を宣布するというロマンティズムの希望は失われ、¹¹ 選ばれた少数者の非功利的、非実証的知識として現代詩は発達する事となる。

現代詩の出発点を象徴詩運動とすれば、その最初の思想的背景を見出すことは困難でない。象徴派が自己の精神的先祖として選んだのはポードレルであり、「悪の花」の詩人はド・メエストルやワグナーを通じてロマンティズム

ムの背景となつたドイツ観念論に接触している。それゆゑ、まずロマンティズムから象徴主義に至る変化においてドイツ観念論の影響を調べ、次にこの影響が象徴派後の詩人においてどの様な変化を遂げたかを検討してみよう。

カントの「判断力批判」によれば想像力は表象を綜合し、認識を可能にする能力であるのみならず、経験による連想を離れて世界を自由に再現する強力な先験的精神 (Seel) の働きである。後者の機能としての想像力が一つの概念に働きかける場合、その概念は先験的理性の働きを惹起すゆゑ無限に拡大されるだろう。この拡大された観念はただ芸術作品にのみ表現されるゆゑに「芸術的観念」と呼ばれる。同時に「芸術的観念」における対象の屬性は、先験的能力である理性の観念であるゆゑに統一され、無限の意味を含み、またその意味はいかなる概念によつても把握出来ぬという三つの特性を有している。たとえばジュピターの驚の意味は絶対に言語で表現し尽す事は出来ないが、同時に一つの明瞭な統一を有している事は疑い得ない。¹²

想像力が統一された無限の理性の働きを含むゆゑに、経験的悟性によつては到達し得ぬ真理を啓示するという考は、十八世紀の悟性の文学の伝統を破り、夢と無限を求めるロマンティズム運動の強力な理論的背景だった。カントの先験的能力としての想像力の理論を英文学に導入したのは勿論コルリツデで、彼の「判断力批判」研究の跡は美学上の小論文に見られるのみならず、恐らくはウァズアースの「序曲」にも影響を与えている。¹³ コルリツデは無論カント研究から創作活動を始めたのではなく、まず想像力の絶妙な働きが“The Rime of the Ancient Mariner”の夢幻の世界を生み、次いで自己の創造活動の理論的解明をドイツ観念論に求めて「文学的自叙伝」に有名な想像力の定義を書いたと考えられよう。¹⁴ “The Rime of the Ancient Mariner”において超自然力、自然力、道德の三つの要素が神の愛という中心で見事な統一を保っているという事実、さらにこの詩の隅々迄拡がって捕え難い意味を響き交わしている不思議なリズムを考えると、“The Rime of the Ancient Mariner”はまたかもカントの「芸術的観念」の無限性、統一性、不可捕捉性の理論を例証する為に書かれた様に思われて来る。この様な無限性と統一性の結

合と精神と世界との統一をロマンティズムに特有のものとして、 仮に Romantic Coherence と名づけておく。

カントの「判断力批判」の中に描かれた想像力の働く場、すなわち先験的な理性によって無限に拡大された意識の中では、無数のイメージがその統一のうちに相互に限りなく多様な意味を与え合うことになる。つまりイメージは Romantic Coherence の存在する場所では象徴と変るわけで、この様な体験はボードレールの有名な詩 “Correspondances” に明瞭に記録されている、内在する理性の光で明るく、また昏く照らし出された無限の宇宙は想像力の働きをことほぐ寺院となり、イメージは象徴の森となって舞めき、色と香りと、音とは限りなく多様な意味を響き交わすのである。

ボードレールの象徴詩を通じて象徴派に伝えられたカントの「芸術的観念」の持つ無限性と統一性の感覚は、今世紀に至ってもなおヴァレリーの詩論に根強く残っている。ヴァレリーによると詩は言葉を超えた音楽の世界であり、そこにはカントの「芸術的観念」を思わせる、概念による把握を超えた先験的「純粹存在」が舞めいており、詩の言葉はそれゆえに言語を否定するためのみ用いられねばならぬとヴァレリーは考える。¹⁵ それにもかかわらず、ヴァレリーの詩論をよく検討してみると明らかにロマンティズムの詩人が考えなかつた特殊な重要性を詩の言語そのものに置いていることがわかる。ロマンティズムの詩人にとって、詩の实在は主としてその内容にあったことはマシウ・アーノルドの「詩は歴史よりも高い真実と高い誠実さを持つ¹⁶」というような批評によっても明らかである。ヴァレリーにあっては詩は何よりも言葉であり、言葉とは一面では「形式」（音、リズム、アクセント）であり、他面では「意味」（イメージ、観念、感情、文脈）であった。詩の实在は意味ではなく、丁度、振子が「形式」と「意味」の間を行き来するように、詩の声と詩の内容の交錯が暗示による意味を無限に複雑化して行く場所にある。¹⁷

ヴァレリーの言語と技巧の重視はもちろん「純粹詩」を求めた象徴派の遺産だった。マラルメは詩人の個人的な声

からあらゆる偶然の要素を抜き去り、純粋な超絶の世界を表現し得るまで詩人は努力せねばならぬと考へていた。理想的な「純粹詩」においては、あらゆる注意を払って組合された言葉のイメージ、意味、音楽の呼びさます暗示の中で言葉は消えてしまい、言葉を超えた先験的世界の統一と秩序だけが残る。詩人が詩の中で「花」という時、実在の花も言葉も消え、実在せぬ花のやさしさ、本質、音楽のみが残るだろう。¹⁸ しかも実際に詩の制作にあたっては、まず言葉が先導すべきであり、もし言葉が完全に「理想」の世界を暗示できる場合には唯一絶対の言葉の配置に到達した時であり、全世界で唯一絶対の作品ができるだろうとマラルメは考へていた。マラルメの「純粹詩」の觀念がこのように完全な理想の統一性と無限性の表現を目指していることを理解すれば、「純粹詩」とはカントの「芸術觀念」を表現しようとするもっとも極端な努力と考へることができる。すなわち「純粹詩」は *Romantic Coherence* の極限の形式である。ロマンティズムと象徴派を分つものは以前に述べたように詩の言語の自律性の自覚であり、この自覚が詩の先験的本質をあらゆる技巧を用いて凝集せんとする域に導いたと想定してよいだろう。

象徴派後のいわゆるモダニズムの詩は、象徴派の發達させた形式と内容の微妙な交互作用による技巧をすべて受継いでおり、言葉を起えた暗示による意味は自由化された韻律と微妙な音声の音楽によって拡大され、二重、三重にかけ合された象徴により複雑化されている。¹⁹ たとえばエリオットの詩の音楽は完全にその内容の一部をなしており、詩人のいわゆる聴覚的想像力²⁰によって読者の意識下に食込み、隠れた詩の内容を伝えずにはおかない。「あれ地」の第五部で詩人が短いスタカットで語る時も、言葉は強烈な暗示力で水のない山路にあえぐ悪夢のリズムをたたみ込んでいく。

And no rock

If there were rock

And also water

エリオットが一九一八年にヘンリー・ジェームズを評して「ジェームズは観念などによって侵されぬほど繊細な心を持っていた」²¹。と断言しているのはいささか滑稽であるが、詩人がロマンティズムの要求する、概念によっては把握できぬ理想的知識の探求を極限化した過程において概念と伝達の言語から可能な限り隔たった位置まできた事実を示している。

しかし、ロマンティズムから象徴詩を経て現代詩に至るこの一貫した伝統にもかかわらず、現代詩はただロマンティズムが実証的・伝達の言語との対決を通じてより尖鋭に意識されたものとのみ定義することはできない。エリオットの「我々の時代のボードレル」²²を知っている読者は、筆者がボードレルにロマンティズムと象徴派をつなぐ位置を与えたことに抗議するだろう。事実、理性の光に照らされた、統一された宇宙はボードレルにとってはあまりに早く地獄に変わってしまい、地獄の嘲笑^{バゲーシュ}がもはやロマンティズムの統一した世界を持たぬ現代詩人に強く訴えたのである。象徴詩から象徴詩後の詩への移行の背景には、十九世紀を通じて徐々に行なわれたドイツ観念論の最後の解体があり、それを背景に詩は微妙な変質を遂げたからである。象徴派は一八八〇年代という最後に残された僅かの時間に、観念論の伝統に頼って詩を書くという行為に献身した小集団だったが、今世紀のはじめには象徴詩そのものの解体がはじまる。

象徴詩の変質の徴候は後期象徴派²³ともいうべきイエーツの象徴詩論（一九〇〇）にも見られる。この小論でイエーツは象徴をただ定義し難い、しかし正確な感情を惹起すイメージと音の結合と呼んで、シェクスピアからさえ例をひいている²⁴。詩人の意識の中で、ボードレルの考えたように無限であり、統一された詩の宇宙に相互に意味を与え合うイメージとしての象徴の意味は失われ、ただ意識の裏に響く足音のような、捕え難い雰囲気暗示するイメージ

に変わった。Romantic Coherence の統一性と無限性のうち、失われたのは前者の方で後者の感覚は残り、失われたものへの言葉による志向と運動のみが、主題の消去った舞の手振りのように残ることとなった。

Romantic Coherence の消失をもたらした思想風土の変化は、ヘーゲルの歴史哲学序説から十四年も前に書かれたショーペンハウアーの「意志及び表象としての世界」(一八一八)にすでにはじまっている。今日ではただ歴史的意味を持つにすぎないこの特異な書物の含む二元論には注目すべきものがある。ショーペンハウアーの「意志」とは一つの宇宙論的實在で、すべての存在の中に潜む原動力である。この力は理性を持たぬゆえに盲目であるのみならず、人間においてはただ行動にのみ現われる。行動の結果は認識により表象となり得るが、行動の原動力である意志の意味は元来存在しないため、認識はいたづらに意志の運動の型を反映しつつ試行錯誤を繰返す以外にない。この実在と知識の一元化が完全に阻まれていた奇異な世界像は、ロマンティズムの背景となった観念論の自意識と世界理性の先験的統一と背馳している。興味深いことは、ショーペンハウエルの二元論の型はダーウインの進化論の世界像に酷似していることだ。進化論においても環境への適応を強制して生物を進化させる自然は形而上学的實在である。もしダーウインの自然観が純粹に科学的で価値観を含まぬものなら、なぜ大脳の発達をもって進化の水準とし、人類を進化の諸段階の頂点に据えたかというグウルモンの批判は正しい。小脳や消化器の発達を水準とすれば鳥類を人類の上に置くこともできたらう。しかもダーウインの自然は理性を持たぬゆえに生物はただ盲目的に闘争せざる得ず、また自然の实体は生物学者の認識から隠れて生物の個体のみが現われている。ダーウインが、意志、すなわち動植物を生長させ動物を結晶させる力は、より高い自己表現を求めて相剋する、²⁶と言わなかったのは、このような形而上学的な言葉が生物学者の語彙の中になかったからにすぎぬだろう。科学者のダーウインと仏教徒のショーペンハウアーがまったく気質、教育を異にするにもかかわらず、思考形式の著しい相似を示しているのは、ショーペンハウアー流の「意志」として物自体の存在を認めつつ、同時に外界を自己の表象とする唯心論的立場を固守する二元論が十九世

紀の精神風土の原型を伝えているからではないか。

A・G・レーマンによると象徴派はカントもショーペンハウアーもともに「イデアリスム」と考えて差別なく吸収した。その結果、「全世界は自己の表象である」という単純な唯心論と併置されて、唯心論とはまったく両立し得ぬ知覚、経験の相対性という感覚が象徴派に生じている。ショーペンハウアーの理論から推定できるように、彼の表象 (Vorstellung) はプラトンのイデアと異なり、理性を持たぬ意志の働きの型であるゆえ、認識を統制する普遍的理性は想定できない。自意識はロマンティズムの場合のように普遍的・先験的自我への昇華の機会を失って孤絶する。

ショーペンハウアーの二元論はロマンティズムの背景となった観念論の解体の基本的な型を示しているようにみえる。なぜなら、現代詩の異った諸傾向がこの二元論およびその影響に端を發しており、この二元論との関係によって分類できるからである。第一にショーペンハウアーの「意志」を心理学の述語に置換えればフロイドの「無意識」に当るが、この「無意識」を新しい詩の素材とした超現実主義がある。第二に孤絶し、過剰化した自意識とロマンティズムへの郷愁から生じた自意識と反語アイロニーの詩、第三に唯心論と意識の相対性との矛盾をまったく新しい方法で解決したベルグソンの哲学から影響を受けた詩である。最後にダダイスト達は、自我の衝動的発露の絶対性を妨げるものは、ショーペンハウアーの意志のように物自体であろうと、普遍的理性であろうと、また唯物論の下部構造であろうと一切拒否してしまった。この最後のグループはあまりに単純なので割愛し、残りの三種類の詩とその背景を検討してみよう。

第一の超現実派の詩は他のすべての現代詩と等しくロマンティズムの中に出発点を得ている。精神を内部から動かす没個性的な力はゲーテやブレイクがすでに注目し、ゲーテはこれを *das Dämonisch* と名づけ、ブレイクはこの力を人間の肉体と感覚を通じて働く生命力で生産的であるがゆえに善であり、理性はただこの生命力を制限する否定的な機能にすぎぬと考えた。ニイチェは「悲劇の誕生」²⁹の中で明らかにショーペンハウアーの影響の下に、自然と人

間に共通する没個性的なエネルギーを造形美術を生むアポロンの個性化の原理に対立させている。ニイチェによれば古代ギリシャのデオニソス祭典で没個性的エネルギーに酔痴れることから詩の源泉であるデュテュラムボス讃歌が生まれたのだった。個性化の原理は自然と人間に共通の実在である「意志」に繋がらぬまやかしの「表象」を追う状態であり、非個性化のデオニソスの原理は実体と一つになり、「表象」のまやかしの破れた状態である。詩人はもはや創造にあたり、ロマンティズムの時代のごとく真理のヴィジョンを世界を統合する上なる超絶者との一致を求めるのではなく、無意識の中に自己の内なる自然の力との一致を求める。ホルリッチの“The Rime of the Ancient Mariner”の世界が車の舵が中心に集まるように超絶者の愛を中心に統合されていたとすれば、ニイチェの没個性的ヴィジョンは水母のように触手を下方に伸し、精神と世界の原動力の触れ合う場所である無意識の中に理想的なものを探る超現実派の芸術を予想しているといえよう。

事実、一九二四年にアンドレ・ブルトンの「シュールレアリスム宣言」が出るはるか以前、一八八〇年代にジュール・ラフォルグは形而上学的実在としての意志³¹無意識の理論をショーペンハウアーとハルトマンから学び、無意識から意識に移る接点に浮ぶイメージを捕える実験を試みている。フロイドの精神分析の方法が知られ、精神内容を無意識、超自我、自我に分類することが一般化する前に超現実主義が発足した事実は記憶されねばならない。超現実主義の芸術家にとって認識不可能な無意識は、フロイドが考えたように快樂への志向のみによって盲目的に働く力ではなく、意識による制限から解放された未知の創造的ヴィジョンを生む可能性だった。自己の感覚を組織的に錯乱³²させても未知のヴィジョンを求めることが、アルテュール・ラムボーにとって道徳上正しいことだったのは、丁度豊かに生命を宿す闇である無意識に信頼をおくことがD・H・ローレンス³¹にとって善であったことに等しい。詩人の精神内容の中に普段は眠っている未知の力をほりおこすラムボーの芸術は今世紀ではハート・クレーンに受継がれている。一方では機械文明により固定化された日常意識を攪拌することにより、呼覚されたプラトニックな本質のヴィジョンの

押迫る実在感、他方にはヴィジョンの單純さと不思議な対比をなす錯綜した象徴、この二つの要素の交錯のうちにケレーンの詩の本質がある。例として後期の詩から訳出しておこう。

角^{かど}なせる石の板よ、ひとは大理石を

牢獄の敷石に割って始めて眺めたのだ。あの石坑は

山の裾をまわるかどで

ますぐな道は石に潛み探るだろう、あの燃える

大理石の横顔は彼方の棕櫚となって

入日の聳え立つ海をずぶと刺す。おそらくは

人類もまた。時には――

薄暮の中にこの島が浮び上り

インデアンの浴場に浮遊し、キューバの薄明りに目は

ましぐらに雷^{らみ}にむかって進みつつ

乾いた道は石切場の影に銀色にのび

目はあるいは猛^{たげ}く燃え、よろこび

右側へ、うち震えて山羊の細道を行かず

はるかに山腹を――涙と眠りに向わず

哭^{なく}することなき大理石の中に歩み去るのだ。

“Island Quarry”³²

第二の過剰自意識と反^{アイロニー}語の詩も超現実派の詩と同様にロマンティズムの中にその根源を持っている。シュレーゲルの「言語哲学」³³とヘーゲルの「精神現象学」³⁴がともに個の意識を進展させるために絶えざる自己分裂が必要と説いているのは注目に価する。おそらくロマンティズムの後期において、無限に自我を伸長させようとする欲求の背

後に潜む人間存在の虚妄の自覚が強く意識されてきたのが自意識の分裂の原因だろう。このゆえにケルケゴールが指摘するごとく、自己に向けられた皮肉と嘲笑は常に未知の深淵の上に何の防禦もなく投出された人間存在の姿を思いがけず開きみせるのである。

ロマンティシストが分裂した自意識を詩の素材とした古典的な例はバイロンの「ドン・ジュアン」だろう。「マンフレッド」の中で神、運命、悪魔のすべてに対抗して自我を絶対化した詩人は「ドン・ジュアン」で掌を返したように社会の偽善性ととも自己の巨人主義をも茶化してみせる。「ドン・ジュアン」に溢れる機知と笑は自己と社会の双方から断罪された人間が絶望の深淵にかかる一筋の道を笑の中に見出して、その上を飛び跳ねているように、一行毎に人間存在の赤裸々な、死に直面した姿をあらわにしてみせる。一方、自我と世界との喜ばしい響合コレスボンダンスいが消えた後のボードレールには、バイロンの笑に代って苦い呪咀がある。ボードレールの分裂した自我の一方は他方を常に映す鏡となり、詩人の鋭い認識力はその苛責から地獄の美を作り出すゆえに自己はナイフであると同時に傷口37である。さらにジュール・ラフォルクはボードレールの自己分裂の意識にシヨールハウアーやハルトマンの形而上学を持ち込み、世紀末に至ってロマンティズムの統一した世界から孤絶した悲しみをはじけるような機知と笑で表現する。盲目の意志^{||}無意識の支配する宇宙はラフォルクの *L'Imitation de Notre-Dame-la lune* では一切の生命を吸尽す月で象徴され、その無意味にほん弄される詩人は月の祭司、ピエロの姿をとって、ラフォルクは「聖母なる月」に皮肉な崇敬イミタシオンを捧げる。バイロンの深淵上の踊りはラフォルクの自由なリズムでは特に軽やかである。³⁸

T・S・エリオットは明らかに本質的にはボードレール、ラフォルクの系統をひく自意識と反語アイロニーの詩人だった。周知のように、ハーバードの学生から詩人を誕生させたのはラフォルクの影響である。「J・アルフレッド・プルーロックの恋歌」の冒頭に説明もなく突如現われる二人の人物、「さあ行こう。君と僕と」はシュレーゲルのいう、

内面の対話によってはじめて獲得できる自意識ではないか。詩の末尾に二人の人物が「我々」と統合された時、話し手は挫折を象徴する海の中に溺れてしまう。ボードレールの自己解剖のナイフを思わせる鋭い自意識は、エリオットの詩では馬鹿げたイメージをとって今一つの自己を壁に釘づけする。

わたしはとうに知っていたんだ。あの目を、

あいつをみんな――

君を型に嵌った文句に仕留める目を、

そしてわたしが型に嵌められ、ピンで

刺されて這廻り

わたしがピンで刺されて壁の上にくぐめく時……。

“The Love Song of J. Alfred Prufrock”³⁹

自意識の詩は、しかし、ロマンティシズムの詩人が誰でも享受していた形而上学的真理から切離されている苦痛を素材にするゆえ、ボードレール風の嘲笑のただ中ですら、突然フランス革命の時代への郷愁が痛ましく噴きこぼれども当然だろう。

驚とラッパはどこへ行った？

アルプスの雪に埋れてしまった。

“A Cooking Egg”⁴⁰

第三の唯心論と意識の相対性の矛盾を解決したベルグゾンの影響から生じた詩はいままで論じた二種類の詩よりはるかに複雑で、最初にベルグゾンによる認識論の特長を明確にする必要がある。唯心論から精神の普遍性を差引くとただ孤絶した自意識のみ残ることは前に述べた。ベルグゾン以前にもウィリアム・ジェームズは思考を意識の絶えざる流れに還元している。しかし、ベルグゾンの独自性は、時間、空間の両カテゴリーのうち、デカルト以来、思考が空間の中で丁度、設計図⁴¹を拡げるように時間を無視して行なわれていたのに対して、時間を唯一のカテゴリーと考⁴²

えることにより、意識の普遍性と認識の合理性の要求から自由を獲得したことにあった。認識はただ絶えざる意識の流れの上に直観的に対象を投影、把握するのみで、その正しさを客観的に証明することは不可能になる。意識の運動がただ存在するように感じられるのみで実在は何もあり得ぬベルグゾンの世界では外界も心象も等しく認識の対象ではなく、ただ時間の持続中における経験となり、その結果主観と客観の差は抹消される。さらに知覚・想像・思考の一切が等しく意識の運動内の経験となる以上、思考と知覚の区別も存在しない。エリオットが有名な「形而上学詩論」において、「思考はダンにとっては経験だった。それは彼の感受性を変えたのである。」と述べている事実は、パウンドやエリオットのグループにベルグゾンの学生だったT・E・ヒュームの影響でベルグゾンの認識論が浸透していたことを示している。

ベルグゾンが二十世紀の詩人の意識に与えた最大の影響は「現実」の意味の変化だった。「現実」は客観的に認識され、証明されるべきものから、意識のながれの上に直観的に投影されるか、あるいは想像力で創出されるべきものに変ってしまい、前者も後者も等しく意識の運動内の経験である以上、想像によるイメージも現実の知覚によるイメージも等しく「現実」となった。この変化は詩人の想像力をいまままで「非現実」と「現実」の区別により人為的に与えられていた制限から一気に解放する結果となる。後期象徴派が理想の非現実性を表現するために希薄化された捕え難いイメージを要したのに反し、象徴派後の詩がヒュームの理想とした明晰なイメージによるイマジズム運動（一九一二）をもって出発できたのはまったくベルグゾンと、哲学的にはベルグゾンと似た思想をさらに繊細に表現したレミ・ド・グウルモンの影響によるものである。同時にベルグゾンの新しい「現実」の観念は、十九世紀に対立した現実主義と象徴主義の成果を双方とも、まったく違和感なく綜合することを可能にした。エドウィン・アーリントン・ロビンソンの詩における現実主義の実験が惨めに終わったことを考えると、レアリスムとイデアリスムは一つである⁴⁵と断言したグウルモンの論^{ツイツァシズム}がいかにもイマジスト達にとって貴重であったか理解できる。

ベルグゾンの哲学が代表する「現実」の意識の変化を最初に、また最大限に利用したのはエズラ・パウンドの「キヤントーズ」だった。パウンドは古代ギリシャ、ルネザンスのイタリアおよび現代西欧の三つの異った歴史上の時代のイメージを意識の流れの上で自由に組合せることにより、過去を破壊し同時に意味の最高度に凝集したイメージの束 (Vortex)⁴⁶ を作上げて行く技術を創始した。「キヤントーズ」第一章には二つの凝集したイメージがあらわれる。

現代詩人パウンドはルネザンスの学者アンドレアス・デイヴァスの訳したラテン語のホーマーを古代英語の詩形でさらに翻訳しながら死者の国に下る。ついでデイヴァスから引用したアフロディテーのイメージ、*"Cupri numimenta soria est"*⁴⁷ はホーマーよりはるかに古代に連なるアフロディテー崇拜の歴史を想起させる。第一章からすでに「キヤントープ」は西欧の全域の歴史を包括し、破壊して新しく詩の「現実」を作り出すのである。象徴派の求めた言葉の制限を超えた純粹に理想的な内容は厳密に選ばれた言葉の響きと透明なイメージの美しさからとらえ難い意味をなしてゆらめく。しかも各々のイメージから閃光の放射するように放射された意味が他のイメージに響き合い、読者は詩人の伝える意味を概念としてもとらえることが可能である。例えば第四章に短かくアテケーの花嫁のイメージがあらわれる。

サフラン色のサンダルが細い足を

花びらの様に掩う。おおハイメニアスよ。

ハイメン、おおハイメナエよ、

アウルンクレイアよ、

緋の花が一つ白い階段きざしに落ちて。(IV:15)

「アウルンクレイア」は同じ章にトロイの落城の場面に使われている事実から「ローマ帝国の先祖」⁴⁸の意味を得ており、太古からの花嫁に対する祝福を想起させる。(「あなたは千よろずの人の母となれ、あなたの子孫はその敵の門

を打破れ」と旧約のレベカは祝福された)。また「ローマ帝国の先祖」の意味からこの場面は二十章のアンキシスがイタリアに逃れる場面に連なる。このようなイメージと連想の技巧により、死の商人の利潤追求のため現代の西欧が殺戮の場と化していくリアリステックな描写はもつとも美しい場面と意味を交わし合い、詩人の文明批評と、経済学説を伝える。ここで「キャントーズ」の代表するような、象徴詩の特性である詩の超絶性に、連想の技巧により文明批評や理論を加えた詩を仮に「自律的現実詩」(Poetry of Autonomical Reality)と呼んでおこう。パウンドの強い影響の下に書かれたエリオットの「あれ地」、クレーンの「橋」、ウィリアムズの「パタソン」などの野心的な文明批評の詩はこの項に属するものが多い。

空間のカテゴリイのみ依存する思考が認識を歪んだ抽象の中に押込める点でベルグゾンに同意しつつも、ベルグゾンの説く空間のカテゴリイを破棄する必要性に疑問を持ったのはA・N・ホワイトヘッドだった。「科学と現代世界」においてホワイトヘッドは、ベルグゾンが具体性を誤った場所に求めていると指摘し、デカルト以来の思考の抽象作用は物質と精神を対置させたことに発していると考えて、外界と精神内容の結合を現代科学の「時間—空間」のカテゴリイにおける知覚集合 (Prehensive Unity)⁴⁹の持続としてとらえることを提案している。ホワイトヘッドの集合の持続もベルグゾンの時間の持続と等しく経過であるが、ホワイトヘッドは経過の総計を唯一の实在と想定することに、ベルグゾンのように实在を抹消することなく、思考を客観的に実証する可能性も恢復している。しかし認識の主体Aが認識する「時間—空間」の知覚集合Aを考えると何よりAの認識の目的によって同じ「時間—空間」をBが認識したBと異なる集合を得ていることは不可避であり、異なる集合の総計はただ理論的のみに有得るゆえ、ホワイトヘッドの認識論もベルグゾンの場合と等しく、今世紀に急激に抬頭した相対主義に属すると言えよう。

ウェルナー・ハイゼンバーク⁵⁰によると科学的認識さえ今日では相対的なものとみなされている。アインシュタインの有名な理論をまつまでもなく、ある物体の運動がそれにかかる力の量と条件とさえ決定されれば正確に予想できると

いう前世紀の科学的決定論を覆したのは量子論だった。マックス・プランクは原子がその放射能を不定の速度と回数で放射することを発見し、ニールス・ボアは原子の構造を極微の太陽系とみるか、または放射能の波に囲まれた核とみるかは実験の際の想定によると述べている。科学が客観的に正確な自然像と考えていたものは実は実験に際して計器にあらわれる物質の反能であり、人間精神の型を外れた計器を作ることが不可能である限り、科学においても思考に内在する型から発展した仮説乃至虚構をみているとハイゼンバークは考える。

「現実」と「虚構」の区別の失せた現代において相対的な個の認識はただちに世界を破壊し、再構成する行為とならざるを得ない。この事実を詩の素材とするほど鋭く感じたのはウォーレス・ステイヴンスだった。「我が壺の物語」にあるテネシーの山上に壺を置く行為により世界を再構成するという主題はホワイトヘッドの理論を思わせ、また「ブラックバードを観察する十三の方法」には視点の変化による世界の絶えざる破壊と再構成が豊かなイメージで描かれる。しかし、詩人がコンピューターの技術者と異なる点は、ある任意の集合を選択した場合に排除された他の無数の集合の可能性を意識せずにはいられぬことだろう。詩人の困惑は詩を生み出すのに必要な感情的抵抗であり、ステイヴンスはその抵抗を喜劇的に表現する。

Chieftain Ifucan of Azcan in caftan

Of tan with henna hackles, halt!

Fat! Fat! Fat! Fat! I am the personal.

Your world is you. I am my world.

You ten-foot poet among inchlings. Fat!

Begone! An inchling bristles in these pines,

Bristles, and points their Appalachian tangs,

And fears not portly Azcan nor his hoos.

“Bantams in Pine-woods.”⁵¹

詩人が「もし…するならば…出来る」(Ifucan)と想定し、または「…故に…出来る」(Azcan)と任意の集合を選び長衣カクタンを着た酋長のように世界の前に立塞がって「フー」と大見得を切っても、微妙な事実 (inching) は小揺ぎもせぬばかりか雄鶏のように毛を逆立て地面を蹴って立向って来る。個の認識の絶対性と相対性の懂着がもたらす笑は都會的であり、もはや自我の中に宇宙を見出せぬ現代人の哀感を洗練と知性をもってくりひろげてみせる。

「虚構」として詩人が創造する「現実」はたとえ相互に矛盾し合うとも、この矛盾した「現実」以外のものを創造する可能性は何一つあり得ない。このゆえにスティヴンスは詩を Supreme Fiction⁵² の名で呼んでいる。スティヴンスの詩論は、詩のイメージの真偽を判定する根拠はまったく存在しないと主張するパウンドの詩論と等しく、詩の「現実」の絶対性と自律性を要求するもので、この点で「自律的現実詩」は単なるロマンティズムの屈折や複雑化と異なり、ロマンティズムには存在しなかった要素を附加したものとと言える。詩の探求する知識はロマンティズム象徴詩においても象徴派後の詩にも等しく理想的なものの知識で、マラルメが碧虚の色 (“L’Azur”) で象徴し、パウンドが「精神の永遠の状態」⁵³ と呼び、スティヴンスが「混沌における正常」⁵⁴ と表現するものである。しかしロマンティズム象徴派にとって理想はすでに存在し、詩の技巧により暗示されるべきものであるのに反し、自律的現実の詩人たちは理想そのものが詩人の意識により作出す「現実」の一つの状態として言葉により作り出すべきものである。オーデンの警句を借りると詩人は表現するまでは自らの詩の意味を知らない。相対性と虚構性が現代精神の本質とすれば、自律的現実詩こそ現代精神の鋭意な意識化といえよう。

詩の現実の自律性にベルグゾンその他の現代思想とまったく関係なく到達した点で独自の詩境を拓いたものにイエ

ーツの「仮面」の観念がある。イエーツが前世紀の稀薄な後期象徴派の詩から脱皮した機縁は一九一三年から一五年にかけてイエーツの秘書を勤めたパウンドが日本の能の翻譯を出版したことだった。イエーツは死者たちからなるこの特異な演劇に丁度コクトーが繰返し描くように、鏡の後の非存在の世界に劇的にはいる方法を発見した。イエーツは能の形式を模倣して「踊手のための四つの劇」を書き、その最後の「カルヴァリイ」において客観的世界を自己の守護靈の夢と規定している。同じ頃に書かれたイエーツのスピリチュアリズムの神話「幻想」によると守護靈の夢として詩人にあらわれる形象が「仮面」であり、その中に創造者としての詩人の人格が統一される。イエーツの独自の神話は詩人にとって丁度手袋を裏返すように主観と客観の機能を交替させ、詩の現実に実在を与える役割をはたした。事実、主観（アンテイセテイカル）対 自（アソク）の世界を実在と定めた神話を書き終えたイエーツは「塔」（一九二八）を出版し、現代詩人として目ざましい転身を示した。幽霊や守護靈は単純であり、人間は複雑であるから、人間は前者と「仮面」を作ることにより戦い結合し、人間に欠けている恐怖の表現を作り出すと詩人は言う。イエーツの詩の愛好者にとってこのマスクとは人間の直面する恐ろしい制限と、このような制限を超えて無条件に美しくあらねばならぬ芸術との葛藤であることを直観するのは容易であろう。詩人が老境にはいるほど「仮面」との戦いは緊張を増し、冴えた美を加える。

魂の喜びにからだの傷つかぬ場所で
仕事は花ひらき踊る。

美はみづからの絶望からは生まれず、

霞み目の叡知も夜半の灯からは生じない。

お栗の木よ、根も大いなる花の咲き手よ、

お前は葉か、花か、木の幹か。

音楽に揺れるからだよ。輝やき増す目ざしよ。

踊り手と踊りをどうして区別出来るか。

‘Among School Children’⁶⁰

イエーツのスピリチュアリズムは詩以外の思想の影響を一切拒否して詩の純粹性を守ろうとする努力だった。その成果がパウンドやステイヴンスと同じく詩の現実の自律性と絶対性を創り出したことは、時代精神の精華としての詩の機能を証明することになる。

以上ロマンティシズムの遺産である詩の超絶性を純粋化し、凝集した象徴詩が、現代における統一した世界観の複雑な分解作用によって分化し、超現実派の詩、自意識と反語^{アイロニー}の詩、自律的現実の詩の三種類が実現する過程を観察した。これらの三種類の詩の底流をなす「無意識」の発見、自意識の孤絶、意識の相対性の自覚はいずれも科学の実証主義の圧力から主観の中に統一原理を持つ観念論の解体が必然となった結果であるゆえ、象徴詩の分化も科学の影響に分類してよい。科学以外に現代文学が受けている思想的圧力には、第一に宗教において、ニイチエの「ツァラトウストラ」とバルトの「教会教義学」に両極化している極端な正統と異端の分極化、第二に史的唯物論と社会革命の要請から生じた社会主義リアリズムがある。しかし、この二種の影響は英米において主要な現代詩を生んでいないことから、現代詩に対する最大の思想的圧力は実は科学だったと結論できよう。さらに副次的な思想的影響として、歴史の詩の中に持つ重要性の変化、文化人類学が発見した神話の意味があり、象徴詩から分化した三種類の詩のいつれにもあらわれている。

現代詩の意識において外界も観念も実在性を失い、ただ意識の運動のみ残る場合、過去は分類された記録ではなく、記憶の形でたえず意識に侵入する現在と変る。この過去の現在性は詩人に歴史の内在性を強く意識させる結果となった。二十五才を過ぎて詩人であるためには伝統の感覚を持たねばならぬという有名なエリオットの言葉は、過去⁶²

のこの内在性において歴史が必然的素材となったことを意味している。

内在する歴史が詩人の意識を侵す時、個の意識が過去からなり、過去に完全に浸っている限り創造作用はあり得ない。もちろん史的唯物論により一種の終末論を想定し、プロレタリア独裁に続く千年至福の必然性を仮定することも過去から脱出する方法であろう。しかし、より個性的な方法として、ベネデッド・クローチェは歴史を理想主義的自己理解と変える必要を論じる。フィヒテが歴史とは純粹に抽象的な論理として、自我の内部から先験的に構成さるべきものと考えた理由もここにあった。ヘーゲルが歴史を精神 (Geist) の自己認識過程と考えた時、なぜ精神の本質を自由と規定したかと問えば、ヘーゲルの時代に勃興した民族主義が自由の要求を覚醒させたという以外に答があるうか。人間は未来を生むために過去に自我の理想主義的理解を投影して歴史を作る。内在的歴史とは未来を生む文化の原動力に外ならない。

シュペングラの「西欧の没落」が第一次大戦直後の詩人に与えた衝撃は、歴史の内在性とその文化の生産力としての特質がすでに詩人の意識内容となっていた事実を証明する。西欧文化の創造力はすでに涸渇し、機械文明の止めどもない拡張のみ残されていると考えるシュペングラは詩人の創造力に対する真剣な挑戦、または絶望の宣言と受取られた。エリオットは後者の場合で、西欧文化の解体を自己に内在する不毛を写すボードレル風幻想に托して「あれ地」を書き、一方シュペングラに承服できなかったパウンドは「キャントーズ」第一章から第三十章において、自我内の歴史的過去に潜入し、自己の精神内容を極限まで凝集したイメージとして引出す実験により、西欧文化の創造力の限界を極める努力を試みている。

詩人の歴史観を過去に投影された詩人の自己理解を考える時、今世紀のもっとも独自の作品はイエーツの「幻想」(A Vision) にあろう。イエーツは創造的存在としての人間を客観 (primary) と主観 (antithetical) からなる二箇の円椎形が各々頂点を他の底部の中心に置いた構造で考え、この構造の多様な作用を構造内に働く力、意志、運命の

本体、仮面、創造精神 (will, body of fate, masque, creative mind) の働きにより、月の満ち欠けを象徴する二十八相に分類して、芸術家はいつれかの相に属すると考えた。イエーツの創造的存在としての人間像が彼の理想的自己理解であることは、芸術的存在の統一にもっとも有利な第十七相⁶⁷に自己を位置づけたことにより明らかである。イエーツはさらにこの円柱形の廻転を歴史的時間と考え、その運動の上に二十八相を移して歴史上の各時代の創造性の多寡を解釈した。創造力が完全な姿となってあらわれる第十五相は地上には実現し得ないが、その理想に近づく歴史的阶段は、イエーツによると宗教的、禁欲的、實際的生活が完全に一致した東ローマ帝国⁶⁸の初期であり、詩人はこの想定に基づいて「ビザンテウムへの航海」、「ビザンテウム」の二篇を書いている。「幻想」の徹底した歴史の再構成は思想的統一を失った現代、クローチエの説くように過去を自己理解の手段とすることは詩人にとって異常な努力を要することを証明しており、また歴史の再構成が現代詩人にとって必須であるゆえに、イエーツ、パウンドのよ
うな巨大なスケールの個性が培われたのであらう。

科学が人間の思考形態を離れ得ず、歴史も人間の自己理解の型に過ぎぬとすれば、より原始的な思考形態である神話から科学、歴史を本質的に隔てる要素は果して存在するのか。エルンスト・カシラーはこの疑問に答えて、科学、歴史、詩のいづれも人間の思考形態として神話と本質的に異らぬと考える。思考形態は事実による実証の不可能ゆえに虚構として斥けられるべきではなく、むしろ思考形態こそ、カントの知覚綜合による認識を先験的に可能にしたカテゴリーであり、内在的意味を持つ原理⁶⁹であるとカシラーは考える。ヴァレリイによるこのような思考形態、または人間の意識の究極の型を意識化することが詩人の仕事であり、さらに現代詩の創り出す現実の絶対性と自律性はカシラーの考える内在的意味を詩に与えるゆえに、歴史、科学、神話、いづれも本質的には詩と異らず、その根底に人間精神の構造の自律性を秘めて造形された現実⁷⁰と虚構と考えてよい。マリノウスキイは神話は茫漠とした物語や象徴ではなく、部族の成員がそれによって生きた現実⁷¹であると言う。人間は有史以前から種族の生存と継続を信じて自己の

精神の型を反映する現実—虚構を神話として創造し、詩として洗練し、科学として正確に理論化したと考えるべきではないか。

カール・ユングはカシラーがカントの術語で考えた思考形態を心理学の術語で原型 (Archetype) と呼び、共通した文化の種族に共有される無意識の心理内容 (Collective Unconscious) に内在する型と定義する。キリスト教以前、また以後に西欧の神話を通じ無数の変形をもって繰返される神の受難と復活の物語の背後に存在する心理内容、また東洋文化に深く根ざした先祖崇拜は Archetype の例であろう。

神話における Archetype の周辺に生じる象徴とその豊かな暗示性を最初に意識して使用した詩はもちろん今世紀前半に最大の影響力を持った「あれ地」である。エリオットはワグナーにより広く知られる聖杯伝説の背後に豊饒を呪する植物神の祭儀を見、荒廃の地に水と生命を求めるイメージとして重ね合わせて現代西欧の幻に屈折し拡大する意味を与える。続いてクレレンはエリオットの影響の下、共同社会の意識を開発し、その永続と理想への昇華を司る祭司として詩人の役割を強く意識しつつ「橋」を書いた。「橋」の冒頭にあらわれるインデアンの酋長、ポカホンタスの娘は米大陸の象徴であり、詩人は彼女を追って開拓者に転身しシシピの谷を下り、捕鯨船で大洋に出、島々を巡ってニューヨークの地下鉄に地獄をくぐり抜け、都会の夜に凝然と立つブルックリン橋に米文化の特質である機械化、伝達の象徴を見、コロンブス以来の移民の西漸運動の延長として理想への努力を言祝ぐのである。

一方、エズラ・パウンドは「キャントーズ」第五十二章から第七十一章でイメージを重ね合わせ連想を呼び覚ます技巧を文化の原型探求に応用して独自の文化論を展開した。パウンドが世界文化の原型を見出したのは中国の祭政一致の伝統と古代ギリシャのエレウシス秘義の相似の中だった。礼記の「月令」⁶⁶に見られる古代中国の年中行事は、ヘシオドスの「仕事と月日」⁶⁷との対比において訳出され、農事、宮廷の祭儀一切が天体の運行に従って行なわれることにより豊饒と新しい年の生命が約束される中国文化の原型が明らかにされる。この中国文化の原型は、パウンドによ

ると植物神デメテルの受難の秘義としてアテーナイで守られ、種族の生命の更新を祝うエレウシス秘義に等しい。エレウシス秘義から生じた神秘主義はプラトンを経てキリスト教神学に受継がれ、西欧文化の伝統の中心をなしている。しかし、中国文化の原型が儒教として哲学化され、堯舜の道として為政者に尊まれたのに反し、西欧ではアリストテレスの論理化により原型から哲学への道は断たれた。この断絶のゆえに詩人は天来の光を直線的に歴史の中に保存する中国文化と西欧文化の結合を要求する。中国文化は男性的で天を象徴し、西欧文化は女性的で地を代表するゆえに、⁷⁹パウンドは中国史に米国第二代大統領ジョン・アダムスの文書を続け、詩における天地の象徴的結婚⁸⁰の中にエレウシス秘義を修して詩人の求める新しい生命への希望を祝う。

以上現代詩に対する現代思想の影響をドイツ観念論哲学、進化論、物理学、フロイド、ユングの心理学、ベルグソン、ホワイトヘッド、カシラー、クローチェの現代哲学、文化人類学にごく簡単にふれながら、詩を書くという本質的には理想主義的な行為が、本質的に反理想主義的な現代思想との相剋の中で、現代詩として自己発見を成し遂げた過程を観察した。十九世紀自然科学の決定論、唯物史観、社会革命思想の集合主義など、詩人の想像力への共鳴を枯渇させる要因があまりに多いことを考える時、詩人が現代精神風土と戦いつつ達成した成果に驚歎してよい。その過程においてラムボーのような脱落者や、クレイン、パウンドのような犠牲者を出しながらも、現代詩は盲目的無意識の観念を理想化して超現実主義の詩を生み出し、ベルグソン哲学を用いて自律的・相対的現実の創造者の位置まで想像力の機能を高め、文明批評の機能を詩に与え、想像力を殺す過剰自意識すら詩の素材に転化し、文化人類学からは共同社会の祭司、内在する歴史の観念から文化的創造力としての詩の機能を新しく発見した。これらの豊かな収穫を生む過程において現代詩は現代精神の特色である非決定論、思想と価値の相対性の意識を取入れ、十九世紀の理想主義と現実主義の対立を理想・現実双方の相対性において統合した。現代の多元的精神風土において、いかなる思想体系も絶対化され得ず、その相対性を自ら受入れつつ他の体系への批判となり、新たな体系を生み出す契機とならねば

ならぬ。現代詩はロマンティズムのような絶対、無限の統一性を持つ知識を求めぬ現代において精神の相対性そのものを詩化し、現代批評精神のもっとも尖鋭な意識化に成功したと結論してよい。

この結論に一見背馳する現代詩の一面はW・H・オーデンやロバート・ロウエルにみられる実存主義の傾向である。実存主義は主体の決断に一切の価値を与える論理であり、現代精神の非決定論的・相対的性格と相容れぬようにみえる。ハイデッガーがアリストテレス以来の伝統を破り、論理学上にいかなる項にも分類し得ぬ⁸¹という理由で哲學的探求から除外されていた「存在」をあえて取上げたのは現代思想において実在が虚構の中に消え、記号体系と化することに對する抵抗に外ならなかった。実存主義は現代精神の延長か、また否定か、ハイデッガーの理論と実存主義論を検討してみよう。

ハイデッガーは「存在と時間」の中で、人間における存在の自覚(Dasein)は第一に思考が空間のカテゴリーで行なわれるため、思考の主体が他者と認識されることにより、第二にDaseinの現実が過去として認識されることにより掩われていると考える。この存在の無自覚により自我は他者と世界とのあるべき関係から切断され、その正しい自覚の状態である実存(Existentialia)から逃避し、墮落の状態に在るゆえ不安を感じる。実存主義の論理において善とは掩われた状態を自覚し、終末に向つて虚無の中に投出された自己の危機的状況に直面するという「永遠の価値ある選択⁸²」を成し遂げてDaseinの真理を実現することである。しかし、Daseinがその真理に到達した事実の証明はカント哲学に帰つて良心の承認に求める以外になく、また良心がDaseinの真理を先験的知識として持つか否かに関しては経験⁸³による証明しか与えられない。ゆえに、実存主義はDaseinの実存即善^{アポロキア}という経験的事実の精緻な弁護論にすぎなくなる。しかも実存主義により弁護される善とはゲーテの「汝自身に忠実であれ」というロマンティズムの論理以外の何であらう。

実存主義はそれゆえ価値を自我に内在する世界の統一性と無限性に発見したロマンティズムの伝統が、統一した

世界を失った現代にあって自我の存在の事実そのものを価値化した結果と考えられる。第二次大戦直前から、戦中、戦後にかけて歴史が巨大なスケールで個人を蹂躪した時代に追いつめられた自我意識は危機的に高まり、オーデンは無意味な状況にとらえられた個の存在を独特の切迫したリズムと頻繁な頭韻を用いて表現する。

After shaking paws with his dog,

(Whose bark would tell the world that he is always kind.)

The hangman sets off briskly over the heath;

He does not know yet who will be provided

To do the high works of Justice with:

Getting closing the door of his wife's bedroom,

(Today she has one of her headaches)

With a sigh the Judge descends his marble stair;

He does not know by what sentence

He will apply on earth the Law that rules the stars....

“Horae Canonicae” (祈祷の時)⁸⁴

飼犬とやさしく握手して野に出る刑吏も、妻を見舞って仕事に向う判事も、声もなく彼等を取巻く何物かにより戦争の正義の遂行に引き掠られて行く。しかも彼等を強制する存在はなく、正義もあり得ない。オーデンの描くのはカフカの「審判」の世界であり、悪夢より恐ろしい現実の無意味である。高まった自意識は外に目標を見出せず自己に投げ返され、理由のない罪悪感が詩の現実として鼓動を響かせる。オーデンの詩の主題は原罪意識であり、戦争の時

(Horae Canonicae) は祈祷の時である。

実存主義者が真理は自己の存在を意識する者 (Dasen) の自己発見—実存以外にあり得ぬと想定した時、彼の実存以外の世界は本来的に不条理と変った。この不条理の世界で人はシシフォスが⁸⁵大石を再び転り落ちるのを見るためにのみ坂の上に運び上げるように、自らの実存の真理を絶えず創り出さねばならぬ。ロバート・ロウエルの詩は詩人を取巻く不条理の一つ一つに全人格的に関与することにより、まったく新しい叙情を生み出している。

わたしがイタリアから母の遺骸と船出した時、

ジェネヴァ湾の岸辺はるかに

燃える様な花が咲き出していた。

黄と青の気違いじみた水上樅は

ハンマーの様に爆発的に

わたしたちの定期船の白い泡をよぎり

わたしのフォードのどぎつい色を思わせた。

母は船艙に収まって一等で旅した。

「^{リッパルギメントー}復活」と名のつく樅は黒と金で

アンヴァアリードに在るナポレオンの樅に

似ていた。…………

遺骸は

菓子^{パネトーネ}の様にイタリアの錫鉛で包まれていた。

“Sailing Home from Rapallo”⁸⁶

実存主義に内在するロマンティシズムの伝統の変形に加えて、相対性の点においても実存主義は現代の伝統の帰結

である。Dasein の真理にはそれを経験したものの証言以外いかなる客観的証明の可能性も存在しないという状況は現代精神の相対性の極まった状況ではないか。サルトルの人は自己の実存を選びとる自由に罰として定められているという言葉は、⁸⁷ 実存主義が現代人の迫込まれた、現代精神の相対性により自己そのものが消失するという危機からいかなる犠牲を払っても脱出するための努力ではないか。

実存主義はそれゆえ、ロマンティズムの伝統が相対主義により分化、変質した現代精神の極限の形を代表しつつ、その極限化においてロマンティズムの統一と最終的に訣別し、現代精神の相対化という救いようのない事実から、自我の決断以外を不条理と宣言することにより主体の価値を救い出した行動である。実存主義はこのゆえに現代精神の継続と否定の両面を含み、おそらく現代と現代後をつなぐ契機となる。象徴派後の詩の技巧を身につけて出発したロウエルが精緻な象徴と形式を捨てて実存主義的な *Life Studies* (一九五九) を出版した時、象徴派後の詩は明らかに終わった。その後アラン・ギンスバーグやアン・セクストンたちの自らの狂気を題材とした告白詩がはじまる。告白詩の背後にある精神風土の理論的意識化は実存主義以外未だあらわれていない。現代の読者には捉え難い、しかし次の時代には明瞭な現代後の詩の要素は、もし今存在しているとすればおそらく実存主義からの展開であろう。

1. *The Modern Tradition: Backgrounds of Modern Literature*, ed. Richard Ellmann & Charles Feidelson, Jr. (New York, 1965). 以後この書からの引用はすべて M. T. と省略する。
2. 勿論「現代の伝統」に収められた諸思想はドイツ観念論から進化論、核物理学など、筆者がただ素人の学徒としてのみ接し得る現代のあらゆる学問の分野を含んでいる。それにもかかわらず筆者が「天使も恐るる道」に踏み込む理由は一つには現代詩の解釈のため科学、心理学、文化人類学の知識が不可欠のゆえであり、第二には現代芸術はロマンティズムの余波であるという考えがかなり賛同を得ているため、この意見の妥当性を検討してみることが望ましいからである。昭和四十五年度アメリカ研究セミナー（京都）においても、文学部門の討論に講師ビヤソン教授の指導により、主として、現代米詩におけるロマンティズムの影響に焦点があてられた。現代文学の専門家にとってロマンティズムを前衛芸術運動まで拡大解釈する試みは容易に反駁し難い一面の真理を含んでいる。たとえば白痴であるがゆえに永遠に純粋なヘンジイのウィジョンで始まり、黒人女テルシイの見た神秘の啓示で終わるフォークナーの *Sound and Fury* はその根本理念においてロマンティズムと何処が異なるのか。ロマンティズムから前衛芸術運動への複雑な屈折の分析のためには現代思想の研究は逃れることはできなからう。
3. Cf. A. C. Lehmann, *The Symbolist Aesthetics in France* (Oxford, 1950). pp. 30-37.
4. "... il a deux voies: la première qui est la science, par laquelle, dégageant ces causes et ce lois fondamentales, il les exprime en formules exactes et en termes abstraits: la seconde, qui est l'art, par laquelle il manifeste ces causes et ces lois fondamentales, non plus en definitions arides, inaccessibles à la foule et intelligibles seulement pour quelques hommes spéciaux, mais d'une façon sensible et en s'adressant non seulement à la raison mais encore aux sens et au coeur de l'homme le plus ordinaire." Hippolyte Taine, *Philosophie de l'art*, quoted by Lehmann, p. 25.
5. "The Experimental Novel" (1830), *MT*, p. 274.
6. "... une magie suggestive contenant à la fois l'objet et sujet, le monde extérieur et l'artiste lui-même." Baudelaire, "Art romantique," quoted by Lehmann, p. 85.
7. "Mais le verbe a d'autres vertus encore que de décrire. Il idéalise, et c'est là son caractère propre." Emile Hennequin, "Le poétique et le prosaïque," *Revue indépendante*, VI (1888), quoted by Lehmann, pp. 139-140.
8. "Poetry and Abstract Thought" (1938), *MT*, p. 80.

9. パウンドの「ヒザン・キャントーズ」が一九四九年、ポーリンゲン賞を得た時、この作品にある反ユダヤ主義、ファシスト政権の弁護のゆえに、作品自体の価値を疑問視する批評家が多かった。ポーリンゲン賞の選考者（エリオット、オーデン、テイト、マクリーシュ）はその際、彼等の「ヒザン・キャントーズ」支持の理由を発表しており特にアーチボルト・マクリーシュは筆者が本文に記したごとく、詩の知識の特殊性を明瞭に説明している。Cf. Archibald Macleish, "Poetry and Opinion." *A Casebook on Ezra Pound*, ed. William Van O'Connor and Edward Stone (New York, 1959), p. 87.
10. "The Value of a profane thing lies in what it usefully does, the value of a sacred thing lies in what it is...." W. H. Auden, *The Dyer's Hand* (1962), *MT*, p. 215.
11. Percy Bysshe Shelley, "A Defence of Poetry," *English Poetry and Prose of the Romantic Movement*, ed. George Benjamin Woods (Chicago, 1950), p. 771.
12. ハウンズは *Paria Mia* (一九一三) において詩人の努力により米國に文化的ルネサンスの興ることを切望している。しかし、彼の詩は一般人の理解から遠いものだった。ハウンドはもちろんこのような自家撞着に陥った最初の詩人ではない。ブラウニングは最初のイタリヤ旅行中に見た貧困から詩人の社会的使命を痛感した。その結果がああ難解な *Sordello* だった。
13. *Kant's Critique of Aesthetic Judgment*, tr. J. C. Meredith (Oxford, 1911), pp. 176-177.
14. コルリツギは "On the Principles of Sound Criticism" (一八〇七) と "Fragment of an Essay on Taste" (一八一〇) においてカントの「判断力批判」の内容を部分的に繰返している。ウァズウァースの *The Prelude* で詩人が九才の時、弱死者が湖から引上げられるのを見て、何も恐怖を感じなかったことを回想し
- ...for my inner eye had seen
Such sights before, among the shining streams
Of faery land, the forest of romance,
Their spirit, hallowed the sad spectacle,
With decoration of ideal grace.... (V, 453-457)
- と述べているのは明らかにカントの想像力の持つ先験性の理論が恐らくコルリツギによって伝えられたことを示している。またウァズウァースが描くモン・ブランの絶頂は "A soulless image on the eye" (*The Prelude*, VI, 526) であり、カントのいう人間の想像力を超えた「崇高」の世界を暗示する。

- 14 ロドリギスの「The Rime of the Ancient Mariner」は一七九八年に書かれ、コルリッチがカントを十分に理解したのは I. A. Richards の一九〇〇年と推定される。さらにコルリッチは一八一二年頃からシェリングを好みその影響の下に *Biographia Literaria* 十三章の有名な想像力の定義を書いた。 Cf. "Conversation with H. C. Robinson," *Coleridge's Miscellaneous Criticism*, (London, 1936), p. 394. René Wellek, *A History of Modern Criticism* (New Haven, 1955), II, 75.
- 15 "Poetry and Abstract Thought" (1938), *MT*, pp. 77-81. "Introduction to the Method of Leonardo da Vinci" (1895), *MT*, p. 174.
- 16 Matthew Arnold, "The Study of Poetry," *Poetry and Criticism of Matthew Arnold*, ed. A. Dwight Culler (Boston, 1961), p. 314.
- 17 "Poetry and Abstract Thought" (1938), *MT*, p. 31.
- 18 "Crisis in Poetry" (1886-95), *MT*, pp. 111-112.
- 19 象徴派後の詩の特徴をなす独自のシムボルは「形式の象徴」とでも呼ぶべきものである。「あれ地」の第一部で占醒者のみる「環をなして歩く人々」は非現実の町に溢れる群衆であることと、常に出发点に帰って一向に進展しないこの詩の形式と一致してらる。ハウンドの「キャンテーズ」第一章から第三十章では第二十九章の白い霧の玉がこれに当るだろう。ハウンドやエリオットの詩で見られる高度に発達した象徴はモタニズムの詩が象徴詩の爛熟から生じたことを実証する。
- 20 "What I call the 'auditory imagination' is [the feeling for syllable and rhythm, penetrating far below the conscious levels of thought and feeling, invigorating every word; sinking to the most primitive and forgotten, returning to the origin and bringing something back, seeking the beginning and the end." *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (London, 1933), pp. 118-119.
- 21 "He had a mind so fine that no idea could violate it." *Little Review*, 1918. *Eight American Authors*, ed. Jay B. Hubbell et al (New York, 1963), pp. 392-393.
- 22 "Baudelaire in Our Time," *For Kancelot Andrews* (London, 1928). エリオットはこの小論でアーサー・シモンズのロマン

ティックな反抗者としてのボードレール像を斥け、代って彼の badinage を高く評価する。たゞその “Une Voyage Cythère” の次の行である。

Quelle est cette île triste et noire?—C'est Cythère.

Nous dit-on, un pays fameux dans les chansons,

Eldorado banal de tous les vieux gargons.

Regardez, après tout, c'est une pauvre terre.

Fleurs du mal, Oeuvres complètes (Paris, 1961), p. 111.

23 英詩において、ヘーンを後期象徴派と呼ぶには、スインバーンやロゼッタを前期象徴派と考へねばならぬだろう。スインバーンには、マラルメの精緻な観念論はなかった。しかし、詩の内容や形式の中に織り込むという象徴詩の主要一筋の特色において、他の追随を許さぬ仕事をやっており残してゐる。 *Atlanta in Calidon* には、 “Before the beginning of years” とは、そのローチスや頭ら出しては、足さぬ砂にさらされて一足むきにめり込むちやうなリストはこの悲劇の冒頭にあらわして。

24 “The Symbolism of Poetry,” (1900), *MT*, pp. 61-62.

25 Remy de Gourmont, “The Disassociation of Ideas,” *Decadence*, tr. William Aspenwall Bradley (New York, 1921), p. 21.

26 *The World as Will and Ideas* (1818), *MT*, p. 393.

27 Cf. “Sache une fois pour toujours qu'il n'est d'autre univers pour toi que la conception qui s'en réfléchit au fond de tes pensées, car tu ne peux le voir pleinement, ni le connaître, en distinguer même un seul point tel que ce mystérieux point doit être réel en sa réalité.” Villiers de l'Isle Adam, *Axel*, quoted by Lehmann, p. 43.

28 William Blake, “The Marriage of Heaven and Hell,” *Complete Writings*, ed. Geoffrey Keynes (London, 1957), p. 149.

29 *The Birth of Tragedy* (1872), *MT*, pp. 549-550.

30 “Le Poète se fait voyant par un long, immense et raisonné dérèglement de tous les sens.” Arthur Rimbaud, *Letters*, quoted by Guy Michaud. *Message poétique de symbolisme* (3 vols.; Paris, 1951), I, 137.

16. *Psychoanalysis and the Unconscious* (1921), *MT.*, pp. 593-595.
23. "Island Quarry" (1927), *The Complete Poems and Selected Letters of Hart Crane*, ed. Bron Weber (New York, 1966), p. 61. 大島産
28. Friedrich Schlegel, *The Philosophy of Life and the Philosophy of Language*, tr. A. J. Morrison (London, 1847), p. 398.
34. *The Phenomenology of Mind* (1807). *MT.*, pp. 740-741.
35. Søren Kierkegaard, *Concluding Unscientific Postscript* (1846), *MT.*, p. 747.
36. Cf.
- Some people have accused me of Misanthropy:
And yet I know no more than the mahogany
That forms this desk of what they mean;—*Lykanthropy*
I comprehend, for without transformation
Men become wolves on any slight occasion.
- Don Juan* (IX, 20)
37. Cf.
- Je suis la plate et le couteau!
Je suis le soufflet et la joue!
Je suis les membres et la roue,
Et la victime et le bourreau!
- "L'Heautontimorouménos," *Oeuvres complètes*, p. 74.
38. Cf.
- "Blancs enfants de choeur la lune,
Et lunologues éminents,
Leur Eglise ouvre à tout venant,
Claire d'ailleurs comme pas une."

"Pirrot," *Oeuvres complètes de Jules Laforgue*, (2 vols.: Paris, 1962), I, 227.

39. *Collected Poems, 1909-1935* (London, 1936), p. 13. 465 篇註。
40. *Ibid.*, p. 45. 465 篇註。
41. T. E. Hulme, *Speculations*, ed. Herbert Read (New York, 1924), p. 176.
42. Henri Bergson, *Creative Evolution* tr. Arthur Mitchell (New York, 1911), pp. 203-204.
43. "A thought to Donne was an experience; it modified his sensibility." "The Metaphysical Post," *Selected Essays* (3d ed.; London, 1953), p. 287.
44. Cf. "L'image est vague, lointaine grande, à peine aperçue... toute intelligence est exclue." "Le poétique et le prosaïque," *Revue indépendante*, VI (1888), quoted by Lehmann, p. 140.
45. "...le monde est ma représentation. Je ne vois pas ce qui est; ce qui est, c'est ce que je vois." "Preface" to *Livre de masque* (1896), quoted by Karl-D. Uitti, *La passion littéraire de Remy de Gourmont* (Princeton, N. J. & Paris, 1962), p. 69.
46. "It [an image] is a radiant node or cluster; it is what I can, and must perforce, call a VORTEX, from which, and through which, and into which, ideas are constantly rushing." Ezra Pound, "Vorticism," *Gaudier - Brzanka: A Memoir* (London, 1916. Reprint. New York, 1960), p. 92.
47. 「キプロスを手にとる定めぬわたる」の類。Andreas Divus 訳の「ヘリヤス」などの引用。 Cf. Pound, "Translators of Greek," *Instigations* (New York, 1920), p. 344.
48. 「アマルンクレーア」はカタールの詩人なる花嫁の全名。 Cf. John Hamilton Edwards & William W. Vasse, *Annotated Index to the Canons of Ezra Pound* (Berkeley & Los Angeles, 1959), p. 13. なお "Aurunci" はヘタリナの最中の種族名でラテン詩人などのイタリナの地を指す。
49. A. N. Whitehead, *Science and the Modern World* (1926). *MT.*, p. 401.
50. Werner Heisenberg, *The Physicist's Conception of Nature* (1955), *MT.*, pp. 448-449.

- 51 *Poems by Wallace Stevens, Selected with an Introduction by Samuel French Morse* (New York, 1959), p. 25.
この詩は翻訳すると意味が失われる箇所があるため原文のものを引用する。
- 52 Cf. "Note Toward a Supreme Fiction."
A thing final itself, and therefore, good:
One of the vast repetitions final in
Themselves and, therefore, good the going round.
- 53 Ezra Pound, "Religio," *Panama and Divisions* (New York, 1918), p. 23.
- 54 Wallace Stevens, "Imagination as Value," *The Necessary Angel: Essays on Reality and Imagination* (New York, 1942), p. 133.
- 55 "How can I know what I think till I see what I say?" W. H. Auden, "Squares and Oblongs," *Poets at Work* (1948). *MT*, p. 210.
- 56 *Note or Accomplishment Translated by Ernest Fenollosa and Finished by Ezra Pound* (London, 1916).
- 57 Cf. Yeats's "Note" to "Calvary," *Four Plays for Dancers* (New York, 1921), pp. 135-136.
- 58 イエーツによると生は二つの円錐形(客観および主観)により表象され、この円錐形は互いに頂点を他方の底部の中心におき、その廻転の中に意志、仮面、創造精神、運命の本体の四箇の力が作用する。生は天上の生の裏返しであり、後者において時間を超越する「情熱の本体」と呼ばれる原理は守護霊の集合である。この守護霊の夢が地上の生にあらわれる場所が仮面であり、人格と美がここに統一される。 Cf. *A Vision* (New York, 1956) pp. 189-193.
- 59 Cf. W. B. Yeats, *Per Amica Sientia Lunae* (New York, 1918). pp. 36-37.
- 60 *The Tower* (1928), *The Collected Poems of W. B. Yeats* (New York, 1956). p. 214. より訳出。
- 61 T. S. エリオットの「聖灰水曜日」や「四つの四重奏」は宗教の正統性を求める詩と分類するよりも、現代詩における宗教—神話的イメージの混合化(Electicism)と分類したい。エリオットのキリスト教は保守的であるが「四つの四重奏」の主題はギリシヤ的な循環する時の観念で、ヘルグゾンの永遠に現在しかない時間を克服する努力であり、パウソンドのベルグゾンの時間による「キャンサーズ」の批判である。

63. T. S. Eliot, "Tradition and Individual Talent," *The Sacred Wood* (1920. Reprint, London, 1960), p. 49.
64. Benedetto Croce, *History as the Story of Liberty* (1938) *MT.*, p. 466.
65. G. W. F. Hegel, *Introduction to the Philosophy of History* (1832) *MT.*, p. 458.
66. Oswald Spengler, *The Decline of the West* (1918). *MT.*, pp. 491-494.
67. "As S. seems to mean by 'The West' a lot of things I dislike, I shd. like to accept his infantine belief that they are 'declining,' but still... [sic]." Ezra Pound, a letter addressed to Homer L. Pound January 11, 1927. Yale University. 2079 Typed Letters. April 28, 1896 to December 3, 1947.
68. Cf. Richard Ellmann, *Yeats: The Man and the Masks* (New York, 1948), pp. 236-237. *A Vision*, p. 141.
69. *A Vision* p. 279.
70. Ernst Cassirer, *Language and Myth* (1925). *MT.*, p. 637.
71. "Introduction to the Method of Leonardo da Vinci" (1895). *MT.*, pp. 175-177.
72. Bronislaw Malinowsky, *Myth in Primitive Psychology* (1926), *MT.*, pp. 632-633.
73. C. G. Jung, "The Basic Postulates of Analytical Psychology" (1931). *MT.*, pp. 641-642.
74. 散文において神話を現代の都市生活の拡散と無意味に対比し、その枠組を作品の枠組として利用したのはツィエンスの「トリシース」が最初である。ヘリオンナーはツィエンスから影響を受けた。 Cf. T. S. Eliot, "Ulysses, Order and Myth" (1923). *MT.*, pp. 679-681.
75. Hart Crane, a letter addressed to Otto H. Kahn. September 12, 1927. *The Complete Poems and Selected Letters and Prose of Hart Crane*, p. 248.
76. ただし、ソウナムは原型の觀念をユングよりも文化人類学者レオ・フロベニウスから得た archetype である。 paideuma 亦は わち文化現象の有機的集合原理と呼んでゐる。 Cf. Leo Frobenius, *Paideuma: Umriss einer Kultur- und Seelenlehre* (Frankfurt am Main, 1928), p. 139.
77. Pound, "Canto LII." ソウナムが用いた原本は Séraphin Couvreur, *Li Ki ou Mémoires sur les bienéances et les cérémonies, Texte chinois avec une double traduction en français et en latin* (2 vols.; 2d ed.; Ho Kien Fou, 1913). 邦訳。

77. パウンドはヘシオドスからの抜粋を「キャントーズ」第四十三章に用いている。ヘシオドスの農夫たちもブレアデースが海から登るとき表を刈る。第五十二章では古代ギリシャの三つの季節節にならないパウンドは「月令」の春を省略し、太陽の力の始まり、夏至冬の三季節節に留めている。ヘシオドスが鳥から教訓を得たようにパウンドの「月令」の訳も鳥の役割を強調する。ヘシオドスとの対比は明らかである。 Cf. "The Works and Days," *Hesiod*, tr. Richmond Latimore (Ann Arbor, 1954), p. 63, pp. 96-97.

78. Pound, "Mang Tsz: The Ethics of Mencius," *Impact*, ed. Noel Stock (Chicago, 1960), p. 124. *Guide to Kulchur* (Norfolk, Conn., 1938), p. 307.

79. パウンドは東西文化の特質を前述のフロベニウスから借りた。また儒教文化が天の徳を歴史的に直線的に受継いでいるという観念はパウンドの「中庸」の翻譯 *The Unobbling Pivot* に明らかにされている。Pivot はプロトレマイオス天文学において天の影響が地におよぶ軸であり、グローステナは天の光の反射し集合する線と考えた。 Cf. Etienne Gilson, *La philosophie au moyen âge* (2d ed., Paris, 1947), p. 472. パウンドは漢字の「中」にこの観念を感じ、米国人アダムスが先験的に天来の儒教の徳が自己に内在することを発見したと想定する。

Cf. John Adams, the Brothers Adam

there is our norm of spirit

Our 中

Whereto we may pay our

homage.

Pound, *The Pisan Cantos* LXXXIV: 118.

80. エレウシス秘義の儀式は天地の結合を祝い豊饒を保證する結婚を合とるごとくたとえらる。 Cf. Sir James George Frazer,

The Golden Bough (12 vols.: 3d ed.: London, 1907-1915), VII, 66-67.

81. Martin Heidegger, *Being and Time*, tr. John Macquarrie & Edward Robinson (New York, 1962), p. 23.

- 82 Søren Kierkegaard, *Either / Or* (1843), *MT*, p. 833.
 83 Heidegger, p. 361.
 84 *Selected Poetry of W. H. Auden*, Modern Library (New York, 1958), p. 159.
 85 Albert Camus, *The Myth of Sisyphus* (1942), *MT*, pp. 850-852.
 86 Robert Lowell, *Life Studies* (New York, 1956), pp. 71-72.
 87 Jean-Paul Sartre, *Existentialism and Humanism* (1946), *MT*, p. 837.

附記

この小論は神戸女学院大学研究所助成金による神戸女学院大学文学部英文学科の「現代詩の現代性」に関する共同研究の一環として昭和四十五年九月二十五日、英文学科内で行なった講演に加筆訂正したものである。この研究を可能にした研究所助成金に対して感謝する。また論中のショーペンハウアー、カシラー、ハイゼンバーグに関する部分は米國デューク大学留学中出席したバーナード・ダファイ教授の講義に負うところが大きい。さらにこの小論の研究課題を示唆された二宮尊道氏、講演の際批判、討論に加わられた大野篤一郎、泉敏夫、高瀬ふみ子の諸氏に厚く謝意を表する。(昭和四六・一・七)

Miyake, Akiyo

SOME INTELLECTUAL IMPACTS ON MODERN POETRY

Résumé

No attempt has been made yet, so far as the present writer knows, to outline the intellectual backgrounds of modern poetry in its various aspects — with the exception of Professors Richard Ellmann and Charles Feidelson's anthology of modern thinkers published in 1965, and entitled *The Modern Tradition*. This book enables one to survey the whole intellectual background of modern literature. The aim of this paper is an exploratory use of the anthology for investigating some predominant intellectual impacts on modern poetry, and to interpret through these impacts at least one main characteristic of each of the most eminent English and American poets, such as Yeats, Pound, Eliot, Crane, Stevens and Lowell.

Modern poetry began in the 1880's in France, when polemic symbolists challenged Taine's and Zola's identification of poets' and scientists' knowledge. From the language of science, whose aim it is to attest and communicate, symbolists rigidly distinguished the language of poetry whose function is to idealize. German Idealism, to which they resorted for theoretical support, assumed that the infinite faculty of reason exists inherently with the faculty of imagination. This assumption led symbolists, such as Mallarmé and Valéry, to the development of most intricate techniques. Images and sounds in their poetry work together to constitute symbols, whose suggestive powers increase as their technique is refined until infinite ideals far transcending the language are expressed. One characteristic of predominant importance in modern poetry is the definite separation the

language of poetry has undergone from the function of communication.

On the other hand, German idealism, which once organically unified the mind and the cosmos as Coleridge observed, and which provided a theoretical ground for the Romantic poets' individual idealization of the world, had already disintegrated at the fin-de-siècle period. The symbolist's last-minute exaltation of idealism was gone prematurely. Post-symbolist poetry, although inheriting the symbolists' elaborate techniques, had to form itself under the more direct impact of modern science, such as Freudian psychology, theories of biological and social evolution and philosophical relativism. Schopenhauer's and Darwin's assumption of the blind, irrational force lurking within the human mind and nature alienated the individual's consciousness from any possibility of being unified with some metaphysically conceived universal reason, whose existence Romantic poets were so sure of. T. S. Eliot ironically presented his post-romanticist alienation from the ideal in his poetry of hyper self-consciousness. The modern assumption of an irrational impulse as a source of one's life, however, opens the way for a poet to make contact with nature's power within the human unconscious, just as Romantic poets approached the inspiring power in nature. Arthur Rimbaud and Hart Crane engaged themselves in the systematic derangement of senses, searching thus for new materials for poetry and new sources of inspiration within their psyche.

The most far-reaching intellectual influence on modern poetry, however, is found in the philosophy of Bergson, who reduced thought to a continuous flux of consciousness. Of Kant's two categories, time and space, Bergson chose only time for his epistemology. Cognition is then achieved exclusively through presenting images on the mental flux, which are intuitively formed and therefore thoroughly unattestable. This Bergsonian

flux of time enabled poets to present in images their most abstract and critical thoughts. While presenting images, on the other hand, poets can simultaneously reach over to the transcendental ideals which symbolists sought. Ezra Pound did not miss such an enormous possibility of combining the faculties of presenting images, of theorizing and idealizing together. In the *Cantos* he made as skilful a use of the opportunity as is conceivable for criticizing Western civilization through his own Confucianism and for developing his economic theory.

Protesting the lack of attestability in Bergson's epistemology, A. N. Whitehead suggested a recognition of the external and the internal as unified sequences, and to consider that this unity of prehension should be the sole entity in total. One recalls that Wallace Stevens made a rather comic presentation of his awareness of such prehensive unity of senses and of its relative nature. In either Pound's or Stevens's poetry the absolute position the real and the ideal were given in the nineteenth-century realism and idealism is replaced with the relativity of both the real and the ideal. Modern poets thus succeeded in reflecting the dominating feature of modern awareness in their sense of relativity, although they still uphold the heritage from romantics in their pursuit of personal ideals. Having realized that no cognition of the world exists except as a fiction or a poet's personal way of seeing the world, Yeats and Pound respectively reconstructed history as they personally interpreted the whole historical past in *A Vision* and in the *Cantos*. Hart Crane and T. S. Eliot mythologized their racial, cultural memory in "Bridge" and "The Waste Land" and started the present tradition of making poetry a ritual for celebrating the continuation of a racial, national way of interpreting the world.

In conclusion, modern poets synthesized realism and idealism in the relativity of both the real and the ideal, turning thus into their advantage their frustration that they could no longer

enjoy a direct contact with the absolute ideal as Romantic poets could. W. H. Auden's and Robert Lowell's penchant for existentialism reinforces this conclusion also. Existentialism contains the radical exaltation of the romantic ego. Although it claims the sole validity of truth in an individual's act of choosing, it shares the fictitious quality of modern thought in its complete inattestability of such validity. Most likely existentialists will bridge the modern awareness to its post-modern successor unknown yet, for they inherit from the modern tradition the fragmentation of consciousness, and for this reason they protest all the more radically the present day's pluralistic intellectual climate which destroys individual's integrity.

SELECTED BIBLIOGRAPHY

- Arnold, Matthew. *Poetry and Criticism of Matthew Arnold*. Edited by A. Dwight Culler. Boston, 1961.
- Auden, W. H. *Selected Poetry of W. H. Auden*. A Modern Library Book. New York, 1958.
- Baudelaire, Charles. *Oeuvres complètes*. Textualized and Annotated by Y. G. Le Dantec. Paris, 1961.
- Bergson, Henri. *Creative Evolution*. Translated by Arthur Mitchell. New York, 1911.
- Blake, William. *Complete Writings*. Edited by Geoffrey Keynes. London, 1957.
- Byron, George Gordon, Lord. *Don Juan*. Edited by Leslie A. Marchand. Boston, 1958.
- Coleridge, Samuel Taylor. *Coleridge's Miscellaneous Criticism*. Edited by T. M. Raysor. London, 1936.
- Couvreur, Séraphin. *Liki ou Mémoires sur les bienséances et les cérémonies, Texte chinois avec une double traduction en français et en latin*. 2 vols. 2d ed. Ho Kien Fou, 1913.
- Crane, Hart. *The Complete Poems and Selected Letters of Hart Crane*. Edited by Brom Weber. New York, 1966.
- Edwards, John Hamilton & William W. Vasse. *Annotated Index to the Cantos of Ezra Pound*. Berkeley & Los Angeles, 1959.
- Eliot, T. S. *Collected Poems. 1909-1935*. London, 1936.
- _____ . *For Lancelot Andrews*. London, 1938.

- _____ . *Selected Essays*. 3d ed. London, 1953.
- _____ . *The Sacred Wood*. 1920. Reprint. University Paperbacks. London, 1960.
- _____ . *The Use of Poetry and the Use of Criticism*. London, 1933.
- Ellmann, Richard. & Charles Feidelson, Jr. (ed.).
The Modern Tradition: Backgrounds of Modern Literature. New Yoak, 1965.
- Ellmann, Richard. *Yeats: The Man and the Masks*. New York, 1948.
- Frazer, Sir James George. *The Golden Bough*. 12 vols. 3d ed. London, 1907-1915.
- Frobenius, Leo. *Paideuma: Umriss einer Kultur und Seelenlehre*. Frankfurt am Main, 1928.
- Gilson, Etsenne. *La philosophie au moyen âge: Des origines patristiques à la fin du XIVe siècle*. 2d ed. Paris, 1947.
- Heidegger, Martin. *Being and Time*. Translated by John Macquarrie & Edward Robinson (New York, 1962), p.23
- Gourmont, Remy de. *Decadence*. Translated by William Aspenwall Bradley. New York, 1921.
- Hubbell, Jay B. *et al.* *Eight American Authors*. New York, 1963.
- Hulme, T. E. *Speculations*. Edited by Herbert Read. New York, 1924.
- Kant, Immanuel. *Kant's Critique of Aesthetic Judgment*. Translated by J. C. Meredith. Oxford, 1911.
- Laforgue, Jules. *Oeuvres complètes de Jules Laforgue*. 2 vols. Paris, 1962.

- Lattimore, Richmond (tr.). *Hesiod*. Ann Arbor, 1955.
- Lehmann, A. G. *The Symbolist Aesthetics in France*. Oxford, 1950.
- Lowell, Robert. *Life Studies*. A Vintage Book. New York, 1959.
- Michaud, Guy. *Message Poétique du symbolisme*. 3 vols. Paris, 1951.
- O'Connor, William Van & Edward Stone (ed.). *A Casebook on Ezra Pound*. New York, 1959.
- Pound, Ezra (tr.). *Confucius: The Unwobbling Pivot & the Great Digest*. New York, 1951.
- _____ . *Gaudier-Brzeska: A Memoir*. New York, 1960.
- _____ . *Guide to Kulchur*. Norfolk, Conn., 1938.
- _____ . *Impact: Essays on Ignorance and the Decline of American Civilization*. Edited by Noel Stock, Chicago, 1960.
- _____ . *Instigations: Together with an Essay on the Chinese Written Character by Ernest Fenollosa*. New York 1920.
- _____ . *Pavannes and Divisions*. New York, 1918.
- _____ . *The Cantos (1-95)*. New York, 1956.
- _____ . Yale University. 2079 Typed Letters (Carbon Copies) to Mr. & Mrs. Homer L. Pound and Various Other Correspondents, April 28, 1896 to December 3, 1947. Copies made by Dudley Paige in preparation of his edition of *The Letters of Ezra Pound 1907-1941*.
- Schlegel, Friedrich. *The Philosophy of Life and the Philosophy*

- of *Languege*. Translatd by A. G. Morrison. London, 1847.
- Stevens, Wallace. *Poems by Wallace Stevens*. Selected and Introduced by Samuel French Morse. New York, 1959.
- _____ . *The Necessary Angel*. New York, 1942.
- Swinburn, Algernon Charles. *Poems*. Selected and Introduced by Bonamy Dobrée. London, 1961.
- Uitti, Karl-D. *La passion littéraire de Remy de Gourmont*. Princeton, N. J. & Paris, 1962.
- Wellek, René. *A History of Modern Criticism*. 5 vols. New Haven, 1955-
- Woods, George Benjamin (ed.). *English Poetry and Prose of the Romantic Movement*. Chicago, 1950.
- Wordsworth, William. *The Prelude: or Growth of a Poet's Mind*. Edited by Ernest de Selincourt. 2d ed. rev. Oxford, 1965.
- Yeats. W. B. *A Vision*. With the author's final revisions. New York, 1956.
- _____ . *Four Plays for Dancers*. New York, 1921.
- _____ . *Per Amica Silentia Lunae*. New York, 1918.
- _____ . *The Collected Poems of W. B. Yeats*. Definitive Edition. New York, 1956.